

## 公開実用平成 3-63641

引150

Citation 2

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U) 平3-63641

⑬ Int. Cl.<sup>3</sup>

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 平成3年(1991)6月21日

E 04 F 13/08

M

7023-2E

1 0 1

H

7023-2E

13/14

1 0 2

E

7023-2E

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全 頁)

⑮ 考案の名称 下見板

⑯ 実 願 平1-126064

⑰ 出 願 平1(1989)10月27日

⑱ 考 案 者 亀 澤 清 武 東京都中央区日本橋室町2丁目5番13号 三井第五別館  
東レグラサル株式会社内⑲ 考 案 者 東 久 世 道 昭 滋賀県大津市園山1丁目1番1号 東レグラサル株式会社  
建材開発研究所内

⑳ 出 願 人 東レグラサル株式会社 東京都中央区日本橋室町2丁目5番13号 三井第五別館

㉑ 代 理 人 弁理士 中 尾 充



## 明 細 書

### 1. 考案の名称

下見板

### 2. 実用新案登録請求の範囲

複数枚が羽重ねに基材に取付けられる下見板において、上縁面には表面に平行な突起条を、下縁面には表面に平行な溝を有し、基材に取り付けられるに際して、上下に隣合う該下見板の上記突起条と上記溝とが互いに嵌め合いに係合され、かつ、左右の縁面は、左右に隣合う該下見板が合じゃくりで重ね合わされるように表面に平行な合じゃくりに形成されているとともに、上記突起条の突端は、上記合じゃくりの重ね合わせの面よりも表面に近い側に、上記溝の底端は、上記の合じゃくりの重ね合わせの面よりも裏面に近い側に位置し、さらに、横方向には、上記突起条および上記溝のうち、少なくともいずれか一方の、表面に近い方の側面、上下方向には、左右の合じゃくりのうち、少なくともいずれか一方の、重ね合わせの

面に、それぞれの縁に平行なライン溝を有する下見板。

### 3. 考案の詳細な説明

#### (産業の利用分野)

本考案は、建築物の壁面に使用する、主として窯業系の素材で作られた、下見板に関するものである。

#### (従来技術)

従来、建築物の壁面を仕上げる下見板張りには、押縁下見板張り、よろい下見板張りや、箱目地下見板張りなどがあり、古くからこれらの工法に適した下見板が提供されていた。さらに最近、窯業系の素材を中心に、新しい人工の建材が開発されるにともない、これらの素材が、下見板の素材としても大量に採用されるようになった。窯業系の素材から作られる下見板は、工業的に大量生産できるばかりではなく、比較的込み入った形状に製造することが可能である。これらの下見板の美観の向上、基材への確実な取付け、雨漏の防止などを図るために、例えば、実開昭61-127

237 公報には、下見板の上下の周縁部の形状を工夫する提案が開示されている。

（考案が解決しようとする課題）

もともと下見板は、壁面に取り付けるのに、下見板の上下の横方向の周縁部を羽重ねとして、横張りにすることが多い。窯業系の素材から作られる下見板においても、実開昭61-127237 公報に開示されているような形状を採用することによって、雨漏を防止していた。しかし、これだけの対策では、残された左右の上下方向の周縁部は、継目に押縁を表面から当てがったり、シーリング材を詰込まなければ、雨漏れや水漏れを防ぐことができない。このために、余分な資材と労働力を必要とし、工期が長くなるばかりではなく、長期間使用されるべき建築物にとって、壁面の寿命の点で問題があった。また、羽重ねの部分に、合じゃくりが採用されているのに、取り付け後の壁の表面が平面的で、立体感に乏しい。

特開昭61-129047 公報に開示されている下見板の取付構造は、立体感を損なわないよう

に、羽重ねの部分の基材側だけを固定し、下縁部は固定せずに羽重ねの表面側にしている。しかし、交通量の多い道路や、新幹線に近接するなどの振動をうけやすい建物では、取り付けが不十分なために、下見板が破損したり、取り付けが緩むといった事故の恐れがある。

本考案は、このような従来の、とくに窯業系の素材から作られる下見板が持っていた問題点を解決して、具体的には、左右の上下方向の周縁部からの雨洩れ、水漏れを簡単に防止し、かつ、基材に確実に取付られ、立体感のある形状の下見板を提供することを目的としている。

なお、窯業系の素材とは、セメント、珪酸カルシューム、石膏などの主として無機系のバインダーで固められた素材であって、例えば、木毛セメント、軽量コンクリート、石綿スレート、石膏ボードなどが挙げられる。

(課題を解決するための手段)

複数枚が羽重ねに基材に取り付けられる下見板において、上縁面には、表面に平行な突起条を、

下縁面には、表面に平行な溝を有し、基材に取り付けられるに際して、上下に隣合う該下見板の上記突起条と上記溝とが互いに嵌め合いに係合され、かつ、左右の縁面は、左右に隣合う該下見板が合じゃくりで重ね合わされるように表面に平行な合じゃくりに形成されているとともに、上記突起条の突端は、上記合じゃくりの重ね合わせの面よりも表面に近い側に、上記溝の底端は、上記の合じゃくりの重ね合わせの面よりも裏面に近い側に位置し、さらに、横方向には、上記突起条および上記溝のうち、少なくともいずれか一方の、表面に近い方の側面、上下方向には、左右の合じゃくりのうち、少なくともいずれか一方の、重ね合わせの面に、それぞれの縁に平行なライン溝を有する下見板を提供するのである。

ここに下見板の上下、左右、および表裏は、下見板が取り付けられた状態でのそれぞれの位置を意味する。基材とは、胴縁、柱などの下見板を主体構造に取り付けるために下見板を固定する部材のことである。また、合じゃくりの重ね合わせの

面とは、合じゃくりのうちの、表面に平行な面のことをいう。


(実施態様)

以下、本考案を実施態様の一例をあげ、分かりやすくするために、その取り付けられた状態を図面に示して、これを参照しつつ、さらに詳しく説明するが、本考案に係る下見板は、この実施態様に限られるものではない。

第1図は、本考案の実施態様の一例である下見板を複数枚、羽重ねにして取付けた壁面の正面図である。分かりやすくするために、上下、左右の下見板が外されている状態を示している。下見板は、通常、本図に示されるように千鳥に配列するか、並列に配列して取付けられる。

第2図は、第1図の上下方向(A—A')の断面図であって、本考案の実施態様の一例である下見板の形状と、取り付けられた状況を説明するための図である。

第3図は、同じく第1図の左右方向(B—B')の断面図である。



下見板 1 は、裏面 4 側を基材 2 に向け、上縁面 5 に近接する部分で、釘や木ネジなどの止め金具 7 を用い、基材 2 に取付けられる。取付のために固定する位置は、羽重ねの基材側に位置する下見板の上縁部が好ましい。外観を損なうことがないからである。

下見板 1 の上縁面 5 には、突起条 8 が形成され、下縁面 6 には、溝 10 が形成されている。一方、上下方向の縁面 12 は、第 3 図に示されるように、合じゃくりに形成されている。

ここで、上縁面 5 の突起条 8 の突端 9 は、上下方向の縁面 12 の合じゃくりの重ね合わせの面 13 よりも表面 3 に近い側に位置し、溝 10 の底端 11 が上記の合じゃくりの重ね合わせの面 13 よりも裏面 4 に近い側に位置している。

ライン溝 14 は、横方向には、上記の突起条 8、および溝 10 のうち、少なくともいずれか一方の、表面に近い方の側面、上下方向には、左右の合じゃくりの、少なくともいずれか一方の、重ね合わせの面 13 とにおいて、それぞれ縁に平行に形成



される。本実施態様では、共に、両方にライン溝が形成されている。具体的な取り付けに際しては、突起条 8 は、一段上の列の下見板 15 の下縁面の溝に嵌め合わされ、溝 9 は、一段下の列の下見板 16 の上縁面の突起条に嵌め合わされて、上下の下見板は、係合される。この嵌め合いは、機械の嵌め合いのような厳密なものでなくとも十分である。左右の縁面は、隣り合う下見板の縁面と合じゃくりで重ねられるように取り付けられる。

また、下見板 1 の上縁部の裏面に、テーパ状の面取部 17 を形成すると、下見板 1 は、基材 2 と面接触の状態になって、さらに安定した取付が可能になり好ましい。

すなわち、正面から見ると第 1 図の、側面で見ると第 2 図の、横断面で見ると第 3 図のように取り付けられる。

#### (考案の効果)

本考案にかかる下見板にあっては、上下に隣り合う下見板のの接統部は、その上縁部と下縁部が互いに羽重ねにされ、漏水が防止される。左右に

隣り合う下見板の縁面では、水は、合じゃくりの重ね合わされている面に沿って流される。下端部が、千鳥状に取り付けられている一段下の列の下見板の上縁部の突起条の突端よりも、表面に近い側に位置しているので、水はその下見板の表面側に導かれ、下見板の裏面には流れ込まない。また、毛管現象で奥へ侵入しようとする水は、周縁部のライン溝14で遮断され、防水される。この様にして、本考案に係る下見板は、上下方向の防水も十分なため、多くの場合、上下方向においても、押縁やシーリング材を使用する必要はない。

また、下見板の下縁面は、下に続いて取り付けられている下見板の上縁面と嵌め合いになって係合されているので、固定され、振動で破損されることもない。

羽重ね部は、下見板が二重になっているので、ボリューム感が惹起され、本考案に係る下見板の取付けられた壁面は、立体感の溢れたものとなる。

#### 4. 図面の簡単な説明

第1図は、本考案の実施態様の一例である下

見板を複数枚、羽重ねにして取付けた壁面の正面図である。

第2図は、第1図の上下方向（A—A'）の断面図である。

第3図は、同じく、第1図の横方向（B—B'）の断面図である。

- |                    |                |
|--------------------|----------------|
| 1 : 下見板            | 2 : 基材         |
| 3 : 表面             | 4 : 裏面         |
| 5 : 上縁面            | 6 : 下縁面        |
| 7 : 止め金具           | 8 : 突起条        |
| 9 : 突起条の突端         | 10 : 溝         |
| 11 : 溝の底面          | 12 : 左右の縁面     |
| 13 : 合じゃくりの重ね合わせの面 |                |
| 14 : ライン溝          | 15 : 一段上の列の下見板 |
| 16 : 一段下の列の下見板     |                |
| 17 : テーパ状の面取部      |                |

出願人 東レグラサル株式会社

代理人 弁理士 中 尾 充

— 10 —

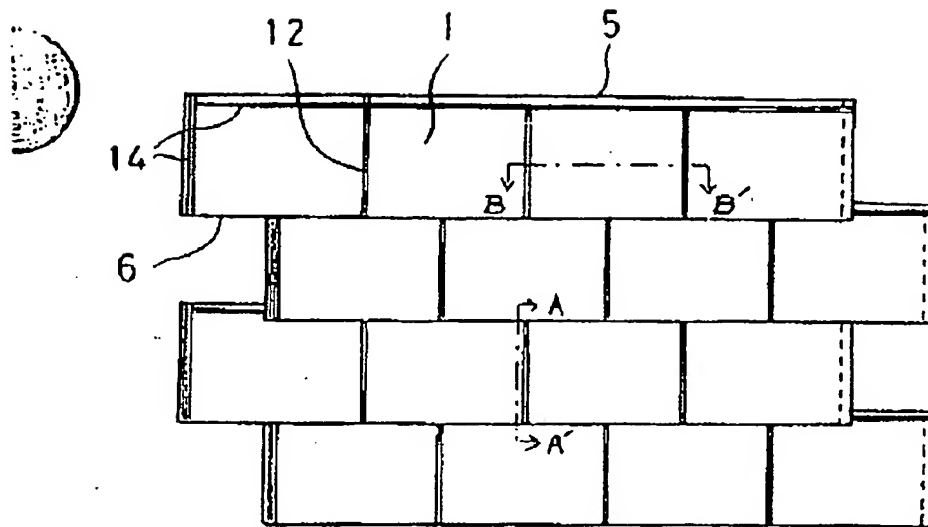


図 1

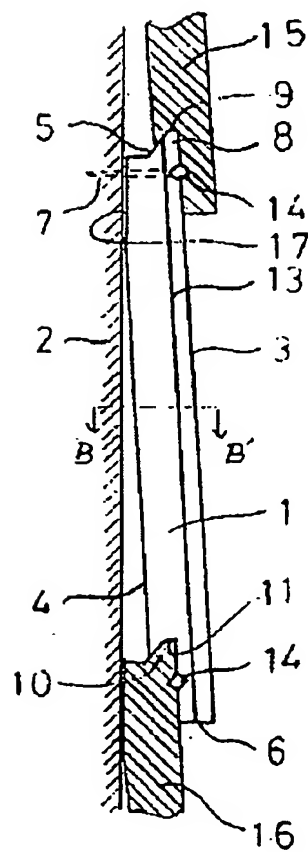


図 2

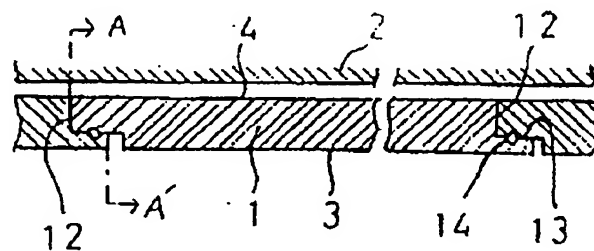


図 3

533

出願人 東レグラサル株式会社

代理人 弁理士 中 尾 充

533 63641